

平成24年度第1回府中市立図書館サービス検討協議会 会議議事録

日時 平成24年5月24日(木)午前10時から12時半

場所 中央図書館5階 会議室

出席者 栗田博之委員、鬼丸晴美委員、及川幸子委員、野口武悟委員、茅原幸子委員、
高田小百合委員、金沢利典委員

欠席者 北谷豪委員

事務局 佐々木図書館長、坪井図書館長補佐、岡田地区図書館担当主査、加藤、菅沼(記録)

1 資料確認

平成24年度第1回府中市立図書館サービス検討協議会式次第

平成23年度第2回府中市立図書館サービス検討協議会議 . . . 資料1

指定管理に関する資料 . . . 資料2

第3期府中市子ども読書活動推進計画策定のためのアンケート(案) . . . 資料3

読書及びメディア利用の興味に関する調査(野口武悟様より提供) . . . 資料4

第42回市政世論調査より抜粋 . . . 資料5

2 館長挨拶

皆様、本日は大変お忙しいところ、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

文化スポーツ部図書館長の佐々木と申します。本日の進行役を努めさせていただきますので、
よろしく願い致します。本日の会議に、次の方から、やむをえない事情で欠席の連絡を受け
ておりますので、ご報告させていただきます。

北谷 豪様 以上、お一人でございます。

また、昨年度で退職されました四谷小学校田中校長先生のあと、新たに新町小学校長、及川
校長先生が着任されましたのでご紹介いたします。

3 及川委員挨拶

この4月より、新町小学校に赴任しました及川と申します。3月までは昭島の小学校におり
ました。昭島の前は、羽村、立川、国立、調布と多くの市で勤務しました。府中に赴任して、
財政が比較的恵まれているためかサービスが充実していると感じます。それでも永く府中に
住んでいる方は、最近では財政が厳しくなったと言われます。充実したサービスをしているの
で、それをアピールした方がいいと思います。教育に関しても予算がついていると感じます。
こちらのような場は初めてですので、よろしく願いいたします。

4 委員自己紹介

5 事務局紹介

6 議題

会長 議題に関して、野口先生が早く退席される関係で、(2)と(3)の順序を逆にして
審議する。

(1) 前回議事録確認

事務局 2月に行われた第2回会議録を委員の皆様様に配布し、ご確認して頂いている。今後、多少手直しをさせていただいて、図書館HPの「図書館からの報告」という箇所に掲載する。

会長 この会が終わるまで、または後日でも指摘する箇所があれば、個々に事務局に連絡して訂正してもらおう。

(2) 第3期府中市子ども読書活動推進計画について

会長 資料内容などについて事務局より説明をお願いします。

事務局 資料3で説明する。第3期府中市子ども読書活動推進計画は、平成25年度から実施する予定で、今年度中に策定を行う。第2期策定時に行ったアンケート同様のものを今回も行う予定で、子ども読書活動推進連絡会でアンケート案を作成している。委員の皆様にはメールにて事前にアンケート案を送っている。時代の流れで第2期のアンケートから少し変更した点もあるが、前回との比較ということもあり、ほとんど変わらない内容で行う予定である。ただ、児童の読書活動に関するアンケート調査については、前は子ども読書活動推進連絡委員会では行っておらず、東京都でおこなったアンケートを参考資料として使ったという経緯がある。今回は東京都で前回おこなったものに似た形のものを子ども読書活動推進連絡委員会で用意し、学校にお願いしようと考えている。

会長 アンケートの参考として、野口先生から提供いただいた資料(資料4)があるので、簡単に説明をお願いします。

野口委員 資料4ということで、私が昨年調査をおこなったものの結果の簡単なまとめと概要を配布していただいた。「読書及びメディア利用の興味に関する調査」ということで、関東関西の国公私立小中高あわせて18校に協力をお願いして、回答をいただいた。読書の発達に関する研究、なかでも読書能力の発達に関する研究は最近多く行われているが、読書の興味に関する研究は、今から50年以上前に東京学芸大学の阪本教授が行って以来研究されていないので、その追調査ということになる。今回は発達動向ではなく、興味そのものの実態について資料をまとめた。

本文は読んでいただくとして、調査内容を簡単に説明する。図1で児童生徒が興味をもっているメディアを複数回答で回答してもらった。児童生徒がどういうものに興味をもっているかということ、小中高共通して1番興味をもっているメディアは、テレビである。よくネット時代と言われるが、今回の調査では携帯やネットよりもテレビが1番である。それからゲームも高い。その一方で、本に対する興味も比較的高いということもわかった。一般的な傾向として、よく言われることだが、小中高と進むにつれて本に対する興味は下がっていく。その他のメディアということで、電子書籍があげられる。まだ電子書籍に関しては、あまり興味がなく、紙の本に興味があるということがわかる。図2は図1で得た結果を学年別に示したものである。

表2は、本に限定してどんなジャンルの本に興味をもっているか調べたものである。ここでいう本は、マンガ・雑誌・教科書・参考書は除いて調査している。

データとしては、50年以上前の先行研究をデータ比較としてつけた。カテゴリーは、

現状にそぐわないものがないわけではないが、基本的には前回のものとあわせた。大きな変化としては、児童文学において、50年前は昔話に興味をもっている割合が高かったが、今は昔話には興味をもっていない。童話の割合があがっている。また、50年前は、怪談や怪奇物語などは調査のデータとしてはあがっていなかったが、今はこういったジャンルに関心を持っている児童が多い。中高生に関しては、大衆文学やライトノベルが今ブームで、こういったジャンルに関心を持っている生徒が多い。

表3～6は学年別に興味の傾向を示したものである。図3は、児童生徒が1日にどれくらい読書をしているかを示したものである。小学生では、20～30分程度が一番多い。中学生になると0分の割合が増えて、高校生では63%の高校生が平日1分も本を読まないという結果がでている。もちろん学校では、教科書などは読んでいるが、それ以外のところでは読書をしないという状況である。図4では、1日あたりの平均読書時間を学年別にみたものである。これによると、案外、中学生の読書時間が長い。ただし、これは平均であることに注意してもらいたい。中高生は読む子はかなり読むので、読む子が平均をあげている。図5は、1ヶ月間で何冊読んだかという調査である。これは、昨年6月に調査したので、5月1ヶ月で何冊読んだか調査した。最も多かった回答は、小学生では1～5冊で37%、中学生も1～5冊で67.5%、高校生は0冊で54%である。この傾向は、全国学校図書館協議会が毎日新聞と共同で学校読書調査を行っているが、かなり似通った結果となっている。1ヶ月の平均読書冊数は図6に示してある。一般的に言われている傾向で、中高にいくに従って減る傾向にある。

特に公共図書館に関しては、選書や読書活動を考えた時に、中高生にいかに図書館を利用してもらうかを考える材料になると思う。興味をもたせたい本というのは別にあると思うが、どういう本に興味をもっているのかをふまえて、中高生に来てもらえるように働きかける必要がある。その際に表の傾向を参考にされるといいのではと思う。

- 会長 アンケートをとられたプロとして、事務局が出されたアンケート案をみて、何か意見はあるか。
- 野口委員 気になっている点は項目そのものではなく、調査対象である。小学生、中・高校生、保護者用とあるが、先生方を対象にはとらないのか。
- 事務局 子ども読書活動推進連絡会では、その予定はない。
- 野口委員 家庭での保護者からの働きかけは重要だが、学校の先生からの働きかけはとても大きいものである。もちろん小・中・高校だけでなく、幼稚園・保育所の先生からの働きかけも重要である。先生方に対しての調査も再考して、それも計画に反映していくことも必要なのではないかとアンケート案を見て思った。ただ、先生方はお忙しいので、答えていただくのは大変かもしれない。もし、可能であれば検討いただきたい。
- 会長 資料がもう一つ事務局からでているので、資料について説明いただきたい。
- 事務局 資料は世論調査の結果である。子ども読書の推進活動にも関わるし、データの運営にも関わることである。また、改めてとりあげたい。
- 会長 では、児童に関するアンケート案ということで、何かご意見ご質問はあるか。
- 茅原委員 配布対象は、どこにお願いするのか、それとも来館者に配布するのか。

- 事務局 配布対象は、前回との比較も考慮して、第2期と変わらない形で行いたいと子ども読書活動推進連絡会では考えている。児童用は、小学校は抽出した3校の6年生全クラス、中学校は3校の2年生全クラス、高校生は依頼できた高校の2年生全クラスに配布、回収する。保護者用は抽出した学校の指定した学年の保護者、市内保育所3ヶ所、幼稚園3園の全保護者に配布・回収する。保健センターでの1歳6ヶ月児健診の保護者に配布をし、回収箱にて回収する予定である。
- 野口委員 学校は抽出ということだが、学年に関しては全学年ということにはならないのか。
- 事務局 全学年のアンケートをとる予定はない。前回の第2期の策定時には児童用のアンケートを子ども読書活動推進連絡会でとっていない。以前に児童向けにアンケートをとった経緯がないので、今回は全学年ではなく、学年を指定して行うということになった。
- 野口委員 全学年はやらなくても、低・中・高学年での傾向はちがう気がする。2・4・6年の間隔で調査した方がいいと思う。
- 会長 野口先生の先程のデータをみると、学年別ででている。どこまで細かくやるかということだが、3つの学年くらいでやっていただければと思う。配布対象を広げても、コスト的にはそれほどかからないと思う。
- 事務局 コスト的にはそれほど問題はないが、学校側にお願いする必要がある。
- 金沢委員 教育委員会とのかねあいもあるのでは。
- 鬼丸委員 こういう委員会が立ち上がり、府中市の子ども達を育成していくのだという本気度が問われている。文化の要は図書館だと思っているので、そこが本腰いれたというのが、教育委員会にもわかってもらわないといけない。今度の市長は教育畑の方だという。今手をつけないという、危機的なところにいると私は思っている。このアンケートは、そんなに時間もかからない。なぜ抽出ということで小さくしていくのか。分母が大きければ大きいほど、府中市の実情が反映される。集計は大変になるが、マークシートにしたら非常に簡単にできる。マークシートのぬりつぶし指導だけでいい。全国に類をみない統計がでて、それが図書館のアピールにもなる。及川先生、この10分程度のアンケートを全校に向けてぜひともお願いするという形をとれば、できないか。学校にデータを戻してあげて、他校と比較したりできれば、先生方も読書に思いを入れるのではないかと。緻密なデータをとればとるほど、実は教育改革となる。他市では類をみない調査になると思う。
- 事務局 子ども読書活動推進連絡会では副会長をやっている。第2期の時には、アンケートの対象としてお願いする学校を府中市の東・中・西部の3校に決めて、依頼した。委員会の中で、今回はどうしようか、児童・生徒数の変化もあるので、学校を拡げるかという意見もでたが、前回と同じところやるべきなのではないことということで、同じ学校にお願いしようというのが現段階の案である。対象学年については、委員の中の指導主事の先生とどの学年がいいか相談しながら決めている。今は、6年で行うということになっている。
- 鬼丸委員 本気度がどのくらいなのかうかがえる。前回、前々回と2回とも計画を読んでいる。本気でやるなら、市民をあげてくらの気持ちがないと思う。財政的には他市より豊かなのに、データが少ないのは問題だ。6年生を対象にすると、塾に行っている場合が非常に多いので、読書量は減る。1番読書量が多いのは小2だと思う。野口先生

も言われたが、各学年で読書量にばらつきがある。難易度が高い本なら、月に1冊しか読めない。小学生だと月20～30冊読めるといった傾向もあるので、全学年でやってほしい。高校は、府中市内に5つ都立高校がある。市から頼みにいけばいやだとは言わないのではないか。抽出ではなく、全校に依頼すれば府中市が読書活動に力を入れているということがみえてくる。

野口委員 6年生だけとなると、かなり偏りがあると感じる。

鬼丸委員 実は市がやってくれたら、担任の先生は喜ぶと思う。学年別の読書量の多い少ないや、低学年の読書冊数が多いのは絵本が多いからといったことがわかる。分析結果をきちんと出さなければならないが、傾向も出てくるので保護者会の時にもう少し読書活動についてプッシュしようという話にもなる。親にアンケートもやるので、親と子どもではとらえ方違うといったこともわかる。保護者会の場にまで、府中市の調査が進出していけたら、こんな調査は他にはないのではないか。

茅原委員 アンケート内容は前回は踏襲したというのは比較という意味があると思う。ある程度計画にもりこみたい内容を調査する必要があると思う。これは、一般的なアンケートだと思うので、府中市の独自性や今後の子どもの声を具体的に生かすといった内容にした方がいいのではと思った。同じ内容でも1種類だけでは低学年では答えられない。学年に合わせたものを作らなければならない。子どもが読んでわかるアンケートにしなければならない。例えば、「市立図書館へ行きますか」という設問について、2小の児童は利用する市立図書館が中央図書館なのでわかりやすいが、地区図書館を市立図書館ととらえられるかといったこともある。

及川委員 先程もお話があったが、2年と6年では傾向が違うので、どちらかだけ調べるのはどうだろうか。時期にもよるが、この1年生にはアンケートは難しい。2・4・6年生くらいでできればと思う。ある程度やり方は学校に任せてもいいのではないか。この学年は必ずアンケートをお願いするが、他の学年も可能ならお願いするくらいがいいのではないか。押し付けられると反発するので、できたらという形をお願いするのがいいかと思う。先生へのアンケートもとっていただけるとありがたい。先生が力をいれているクラスは子どももよく読んでいる。クラスによって倍くらい読書量がちがうこともある。学習指導要領が変わり、以前は週1回あった図書の時間が3年生以上では習字と合わせての年間時数が決まっている。毎週は図書の時間はとれないという背景がある。府中では毎日学校司書の先生がいらっしゃって、すばらしいと思った。ところが、図書のデータベースができていない。財政が豊かでない市でもデータベース化している。データベース化ができていると、統計もとれるし各学校の資料も集まる。毎年、統計は図書の先生が人力でやっているのだが、データベース化がされると他のことにもっと力が注げる。是非ともデータベース化をお願いしたい。

アンケートはとれるのではないかと思う。

会長 前回のアンケートと数値的に比較するのかどうか。前回以降変わったところを変えるというのであれば、以前のアンケートと同じような枠組みを使わなければわからないデータになる。前のアンケートの意味があまりないというご意見なのかもしれないので、もっと細かくきったようなアンケートをした方がいいのではないかという意見が多くでている。コストやキャパシティの問題が大きいと思われるが、マークシートは

使われるのか。

事務局 マークシートは使う予定はない。

会長 マークシートは集計の際楽だが、紙を使って地道に をつけてという方法は、小学生にやり方を指導することを考えると、人力でやるのがいいのかなと思う。方式は、マークシートは考えないということである。それでは、数を増やせば増やすほど、コストがかかるということになる。集計と配布に関しては、何とかお願いしたいが、大変になるということである。可能な範囲がどこまでかを示していただいて、もう少し抽出校を広げられるのかどうか、学年ももう少し細かく切って調査できるのかどうか、項目については小6がターゲットということで、答えるのに難しいものも入っている。低学年には使えないものもあるので、内容を変えずに表現を変えて答えられるように作る必要があるのではないかと。小学2年生へのアンケートとなるとどうなるのだろうか。

及川委員 これでもできるのではないかと。けれども、例えば、設問3の答6の「学習で調べるための本」は答えるのに難しい。これは、調べるために読んでいて、好きかときかれると答えるのが難しい。

野口委員 学習で調べるための本は、事典類をさしているのではないかと。

及川委員 百科事典ときかれたら、好きな子どももいるので、そう聞かれた方がいい。

鬼丸委員 文章をみんなで検討していく方が、価値があるのではないかと。設問5の「本を読むのはどうしてですか」は大人の発想である。これに対し「友だちとの話題づくり」という答はどうなのか。小学生でこれを意識して読んでいたら、いやだなと思う。むしろ、「親からいわれるから」を入れるべきだ。自主的なのが読書の根本である。自主的に読書できる子どもを育成しようという府中市の考え方が根本にあると、このアンケートの内容は変わってくると思う。自主自律を教育的に目指していかないと、言われなくなったらやめるというのでは、生涯読書教育ではないと思う。

会長 今回の項目において、「あてはまる答にチェックをいれてください」という形だが、設問3だけはあてはまるもの全てを選ぶ形式である。野口先生の複数選択可能な項目は、重複を前提にしたアンケートの作り方をしている。次元の違うものを入れてしまうと、データをとってもあまり意味がないということになる。アンケートをとり慣れている方がみていくと、内容を整理できるのではないかと。抽象的な回答もあり、選ぶのが難しい。また、一つだけ選ぶのが難しい設問もある。この項目を確定するのはいつまでか。

事務局 5月31日に子ども読書活動推進連絡会がある。アンケートの最終案はそこで決定となる予定である。ここで出た意見は検討課題として、連絡会に提出する。

会長 2つの事項がある。1つは対象の問題で、より広範囲により細かいメッシュをかけてということを目指すべきという皆さん同じ意見である。もう1つはアンケート自体の内容に関してである。次元の異なる設問が入っていて、回答するのに難しい抽象的な回答もあるので、これを1つずつみていこうと思う。

野口委員 設問3の答5の手芸や趣味は広範囲すぎないのか。

金沢委員 児童では、5、6、7門あたりを1つにまとめる。個人の好みでやるものというくりとなる。料理も人気の高いジャンルで、ここに入る。

- 会長 趣味と最初にあり、その後に羅列という形で追加するのはどうか。
- 鬼丸委員 ノベライズはどこにはいるのか。
- 金沢委員 文字が多ければ物語。絵が多ければ、漫画になるので7門である。
- 鬼丸委員 挿絵の少ないものは、ここでは絵本も物語も同じ1番に入るということになるのだろうか。
- 会長 こちらがどこに入るのか迷うのと同じように、アンケートに答える側もチェックするのに迷うところがある。ジャンル分けは、伝統的に使われてきたものだと思うので、新しいタイプのもの対処すべきか従来型のものを使うのかということ、表記を少し変える程度で対処した方がいいと考える。わからないものはその他を選択する。このような形でアドバイスとして伝えてもらいたい。
- 次に手に入れる経路についてである。書店で買う、親が買ってくる、というのは与えられて読むのか主体性があるのかという観点である。読みたい本を手に入れる際に、「親が買ってくる」は読みたい本ではなく、親が買ってきたものを読まされるという感じがするので、そぐわない。
- 鬼丸委員 小学生には自分で買いに行くものなのか。
- 及川委員 コロコロコミックのようなものは自分で買うと思う。親と一緒に買いに行く場合もある。親だけが買ってくるのはあまりない。
- 鬼丸委員 手に入れるのは、買うか借りるかなのではないか。誰がというのを聞く必要はあるのか。
- 及川委員 図書館を利用してもらう点で聞いたら、買うか借りるかで聞いた方がいい。
- 金沢委員 答 と を一緒にしてはどうか。「書店で買う」と「親が買ってくる」をまとめて「買う」ということでどうか。
- 会長 買うまたは買ってもらおうとすればわかるのではないか。
- 次に設問5の「友だちとの話題づくり」は他のものと次元が違う。
- 及川委員 「友だちとの話題づくり」が「友だちにすすめられて」ならありえる。すすめられて、なら親でも先生でもあるのではないか。
- 金沢委員 「友だちが読んでいるから」というのはどうか。すすめられて、は友だちの間で使うのかと思う。「話題づくり」というのは大人の発想である。
- 及川委員 4月23日の子ども読書の日子ども達に話す機会があり、子ども時代に好きで読んでいた「動物会議」のことを話した。実際に本をもってきて見せたら、図書室で全集の中に入っていたのを見つけて借りて読んだという子どもがいた。積極的に薦めなくても、少し意図的に言えば借りてくれる子はいる。
- 鬼丸委員 ここは「みんなが読んでいるから」ではどうか。読む気がなくても読書熱の高いクラスに入ると読まざるをえなくなる。
- 及川委員 「ハリーポッター」はある種そういった本で、みんなが読んでいるから自分も読もうかという気になる。
- 金沢委員 答 の「考える力が身につくから」も子どもは思わないのではないか。
- 鬼丸委員 「知らないことがわかるから」と同じなのではないか。「おもしろい」も「感動できる」と一緒なのではないかと思う。選択肢はなるべく少ない方が明確にデータとしてとれるのではないか。

- 会長 「親や先生、友だちの間ではやっているから」という項目を入れた方がいいと思われる。
- 及川委員 「おもしろい」と「感動できる」は子どもの感覚では異なると思う。怪談は、「おもしろい」で「感動できる」ではない。
- 会長 ここで確定ではなく、こういった意見があったということで伝えていただきたい。意見としていただきた項目としては、「友だちとの話題づくり」を「親や先生にすすめられたから」に変える。「考える力が身につくから」はいらない。
- 鬼丸委員 次の調査にいきる調査をすべきである。「先生にすすめられて」が多ければ、先生は頑張ると思う。
- 野口委員 このデータは、協力していただいた学校にフィードバックすべきである。計画の最後に報告としてつけるだけではなく、学校でデータをいかしてもらう。
- 会長 唯一の問題は、学力テストと同じで学校の比較をしているのでは、と警戒される可能性がある。フィードバックもうまく伝えていく必要がある。
- 及川委員 学校別のものができると逆に問題がある。全体のデータとその中の個々の学校のデータを伝えるだけでいいのではないか。
- 野口委員 学校の比較がわかるような個別のデータを出すと問題がある。
- 鬼丸委員 そうなると3校だけ絞るとするのはどうか。中央図書館に近いところと遠いところでは、これから先の答え方が違ってくるのではないかと。もともと差があるものをきいて、府中市データだと出すと、他市と比較されてしまっていいのかという問題がある。北山町あたりから、ここまで来るのにお金も時間もかかって大変である。ところが、2小の児童は、ここまで歩いてこられるし、親も行っていいよと言える。北山や押立からは小学生が1人で中央図書館には来られない。分母が小さいデータは怖いと思う。
- 及川委員 4つくらいの学校だと、調査したことを隠さなくてはならないところがある。何でうちが選ばれたのかということにもなる。
- 会長 対象は、キャパシティやコストでできるかどうかという問題がかなり大きいと思うが、可能な限り広くやっていただきたいとお伝えいただきたい。
- 次の1ヶ月の読書量をきく設問についてはどうか。野口先生に質問だが、この冊数の分け方はデータのとり方としてどうなのか。
- 鬼丸委員 この1冊、2冊は細かすぎないか。
- 野口委員 1ヶ月はいつの1ヶ月をきいているのか、限定しないと答えにくい。いつ調査するかによると思う。9月に調査して夏休みの1ヶ月というのと、学期中にやって平日の1ヶ月とだと冊数が違ってくる。
- 鬼丸委員 平均して、という言葉を使うのはどうか。
- 野口委員 それは難しい。具体的な時期、例えば7月に調査するなら、6月をふりかえってもらって、「6月の間に何冊読みましたか」という設問の方が具体的かもしれない。
- 事務局 今の予定だと、6月末から7月上旬にアンケートを配布する予定である。
- 金沢委員 では、6月1ヶ月間を聞くといい。できるだけ休みの入らない月の方がいい。夏休みが入ると日常と生活が違ってくる。
- 会長 冊数のメッシュが細かすぎるという指摘があるが、野口先生のアンケートではどうだったのか。

- 野口委員 私の方では、冊数を書いてもらった。集計の際は、選んでもらう方が楽だと思う。
- 及川委員 小規模校ならエクセルで調査票を送っていただき、各学校でデータを打ち込んでといった対応もできる。ただ、保護者の分までといわれると、難しい。
- 鬼丸委員 保護者は図書館で集計する。この期間に学校側に協力するという形でやれば、先生方にも負担にならないのではないかと。
- 及川委員 小規模校はできるが、5クラスあるような大規模校は大変かなと思う。手あげ式でやれば、短時間でできる。ただ、1、2年生だとずれたりもする。
- 鬼丸委員 調査方法も検討していくべきである。
- 会長 今回のことを考えると、コスト的にはあまり考えなくてよくて、保護者の分だけ紙を送って書いてもらう。調査方法も検討していただきたい。
- 鬼丸委員 マニュアルが必要になる。
- 会長 これをやるにあたっては、先生方にマニュアルが重要になってくる。
- 茅原委員 子どもに関係することなので、アンケートの結果を子どもにも話してもらう。学校にもわかる形で残してもらう必要がある。
- 及川委員 新聞の多摩版のようなところに載せてもらうとPRになる。
- 会長 高学年になると自意識が出てくるので、手あげ式は影響ないのかどうか。周りをみて手を上げるといったことがないのかどうか。
- 及川委員 先にしるしをつけてから、手を上げさせる。子どもは正直なので、その通りに上げる。先生が集計する時だけ、しるしをつけたものを手をあげさせて数える。各クラスの集計用紙を副校長もしくは図書担当の先生がエクセルに入力するというやり方もある。
- 会長 調査の方法は、今言っていた方法も検討していただく。メッシュが細かすぎるということで、もう少し粗くするのかどうか。
- 鬼丸委員 低学年と高学年では、読む冊数が違う。読む本のボリュームが違ってくる。
- 会長 野口先生のデータを見ると、学年別平均では小2は20冊を超えている。4年11冊、6年5～7冊になっている。この差がでるようなメッシュできらなければならないということである。例えば、0、1～5、6～10、ときっていったら、上限は20以上という方が現実的なのではないだろうか。
- 鬼丸委員 0～5でどうか。読みきれていない子がいるということを考えてもらいたい。次の問いで「厚い本を読んでいるから」という選択肢を入れてほしい。不読でないということを強調したい。府中市の子どもは本好きで、厚い本を読んでいるから0冊になってしまっている。否定的なアンケートではなく肯定的なアンケートにしてほしい。
- 会長 0冊が別になっているのは、全く読まない子の割合を知りたいので、そこは残した方がよい。全く読まない子もいるはずで、そこをどうすればいいか、ということもこの推進活動の考える課題になるわけである。そこで、0は残して、1～5、という風にきっていき、読みかけの本も数えてください、といった表現を入れてもらうのはどうか。厚い本と薄い本を同じに数えることまでいうと、アンケートをもっと細かくしていかなければならないので、ここは野口先生の調査データを参考に、5単位で値を検討していただくのはどうか。次の設問で、全く読まないと答えた子どもに対してその理由を聞いているが、何か付け加えた方がいいものはあるか。特にないようなので、設問8の「どのくらい学校図書館にいくか」はどうだろうか。回数に関しては、私は

わからないので、どうだろうか。

鬼丸委員 毎日行く子もいる。

及川委員 回答については、1ヶ月だと小さい子どもは数えきれない。1週間くらいの方がわかりやすいと思う。

会長 継続性を考えなくていいのであれば、回答の選択肢を変更するのはどうか。子どもは1ヶ月に何回という形では数えられない。週に何回、と聞くほうが現実的である。数え方は任せる。設問9も回答は同じように変更していただく。

鬼丸委員 選んだ3校で全く違ってくる。2小の子は毎日行けるし、遠いところの子はいけない。遠い子どもがいけないので、地区館に本を置いているので、地区館の全否定になってしまう。

茅原委員 市立図書館は、中央図書館だけなのか。

事務局 府中市内の全図書館である。

茅原委員 それを分かるような形で書いていただきたい。

会長 それを入れていただくと、変わると思う。

鬼丸委員 中央図書館だけ図書館と呼ぶのか、地区図書館を分館と呼ぶのか、アンケートを受ける側が理解しているかどうかの問題である。

会長 その二つを分けてやるという手もある。地域的な問題で利用頻度が変わるのか。あるいは、関係ないのか。これをきくのはアンケートの性格とずれてしまう可能性がある

茅原委員 子どもの感覚では、中央図書館ということはあまり考えなくてよくて、地域の図書館にどれだけ行くのかを聞けばいい。

会長 アンケートをとる際に、先生にお願いして学校ごとに地域の図書館がここだという説明をしてもらってもいいのではないだろうか。

茅原委員 必要であればこのアンケート内に市立図書館の説明を入れていただくといいと思う。

及川委員 これだけで、大部分の子どもは、市立図書館は、新町小だと新町図書館だと理解している。ただ、2小の子が中央図書館を利用する割合より落ちると思われる。中央図書館のようにたくさんの本があれば、毎日でもきたいと思うが、地区館は小さいのでどうだろうか。あまり利用されていないなというのわかる。

会長 もう1つの議題が地区館に関してなので、このアンケートの中でそこまで出していくかどうかという問題がある。

鬼丸委員 もしここでアンケートの結果がでたら、地区館の活性化にも使えるし、地区館の蔵書数を増やしたり、地区館近隣の小中学校のニーズに応える蔵書内容にしようといった発展的なことにも使えるのではないだろうか。

会長 アンケートの目的はそうではない。子どもの読書活動に関することがターゲットである。アンケートを実施する側からすれば、範囲を超えているということになる。市が中心となってやる読書活動のアンケートの位置づけとして、市の方でどういうふうに区分けするかは任せの方がいいと判断する。

鬼丸委員 回数はこれでいいだろうか。

会長 こういった回答もあると思う。毎日、週に数回から年に数回。9と8は同じ回答方式でいいのではないか。

次の設問10は、図書館に行く目的である。本を借りに行く、レファレンスの目的と

場所提供的な目的が混ざっている。意図としては何をとりたいのかわからない。

鬼丸委員 読書活動の調査ということだとおかしい。

会長 上でたデータを分析するとき、なぜ図書館へ行くのかというならわかりやすい。

金沢委員 図書館の実態からいくと、遊びに行く場合も多い。友達を見つけに行くこともある。府中公園がどうなっているのかわからないが、私がいた図書館は、公園の中にあり、公園でサッカーや野球をやっている子ども達が水を飲みにきたり、トイレにきたりする。親は図書館で遊ばせていれば安全だから、図書館に連れてきて遊びに行ってもいいかなと思う。

茅原委員 高校生の子どもは、学習するために毎日図書館の5階学習室を利用させてもらっている。10時まで開いているのも利用しやすい。図書館に入らなくても、1階のコーナーで集っている子ども達もいる。

金沢委員 おしゃべり機能があり、YAコーナーはまさにそういった場所として利用されている。おしゃべりしたり、集団で作業していい場所である。児童室も大きい声で大人に迷惑をかけるようなしゃべり方はダメだが、普通のおしゃべりはしてもいいところである。子どもは1人で黙々とやるのは苦手で、宿題やるのも友達としゃべりながらやっている。児童室はおしゃべりしていいところである。

会長 図書館にいろんな機能が入り込んでいる。

金沢委員 こういう機能を認めていいのではないか。本だけに限定しなくていい。

鬼丸委員 調査の狙いを考えると、読書活動という調査の中で、「図書館へは何のために行きますか」という図書館の機能調査はちがうと思う。学校図書館は特に心の悩みを抱えた子ども来るので、純粋な読書活動と別の場所になってきている。そこまで含めて読書活動としてきくかどうか。

茅原委員 回答1の「本を読む」というのが仮に少ないなら、どうすればいいのだろうという発展的な考えにもっていけるのではないか。

鬼丸委員 何か次の発展的なデータに使いたいか使いたくないかが基本になるとしたら、純粋性をもたせた方がいい。このまま生かすとしたら、どこかでラインを引かないといけない。読書活動と違う調査をする、という見極めがないとどうなのだろうか。

金沢委員 図書館が教育施設か文化施設かという、行政では議論がある。府中は文化スポーツ部で、教育委員会から離れていて、文化施設の中に入っている。今まで図書館は社会教育場所で教育施設と位置づけられていた。図書館の機能は本であるということが主題になるが、文化施設だと地域のコミュニティとしての機能が大事になってくる。図書館にはそういった機能があることを証明していくことが、今後必要になってくると思う。図書館にとっていいことかどうかは別として、本当は教育施設として認めたいところだが、機能としてコミュニティ施設だという位置づけが強いのではないのだろうか。

茅原委員 他市は、教育委員会の中に図書館が入っている所が結構ある。読書と教育を推し進めたいなら、教育委員会の力がないと進めない。ちょっと弱いかなという気がする。学校をあげて、取り組むといった部分が弱い。データ化もちょっと前に着手しているが、まだ進んでいない。指導補助員の先生に関しても、思うところがあるので、教育委員会に読書に理解を示してもらって、もう少し力を入れてもらいたい。

- 事務局 図書館が教育委員会の中にあるという考え方もあるが、子ども達は色々な場にいるので、府中市として子ども達の読書を盛り上げていきたいという方針である。学校図書館に関しては、承知していることでもあり、もう少し教育委員会が積極的であれば、という意見もきいている。
- 茅原委員 アンケートで学校図書館と市立図書館を分けて、両方に対して要望を聞く設問があるのはいいことである。学校図書館の可能性は大きく、おはなし会等で学校に入ってみるとわかる。学校図書館には、子どもを読書好きにする可能性があると思う。次に図書館でも学校図書館との連携をしていただかないと、ずれや思いの違いを感じている。読書活動推進計画が10年たっているのもう少し具体的な動きをしていただきたい。
- 事務局 市立図書館でのイベントを校長会や教育委員会などで案内している。少しずつではあるが、学校との連携に関して進んできていると思う。
- 鬼丸委員 児童向けにするアンケートの中に要望を書かせるのは疑問である。もし自分のクラスでとったアンケートに「もっと本を増やしてほしい」、「漫画を入れてほしい」、「週刊誌を入れてほしい」というのが出た場合、図書館にお返しするのは心苦しい。純粋に読書活動に関するアンケートにした方がいい。目的が違うものが入り込んでいないか。設問10の「何のために行きますか」を聞くなら、窓口調査の方がいい。図書館に行かない子に聞く必要はない。仮にインターネットをしに毎日来る子が、アンケートに答えて、月に40件もインターネットをしにきたということであれば、もう少しパソコンを増やさなければということになる。学校図書館は学校図書館でアンケートをしてデータをとればいい。子どもに記述させるのはいかなものか。
- 及川委員 特に低学年にきくとなると、何を答えたらいいかわからない。
- 鬼丸委員 市立図書館への要望で「今度近くに建ててください」と言われたら、どうするのか。「遠い」、「図書館へ行くバスをただにしてください」などいろんな話が出てくるので、純粋な読書活動についてにしたらどうかと思う。もし複合的にやるなら、色々な分科会でいきようなアンケートにすべきである。
- 金沢委員 私も賛成である。読書活動を推進するという目的をしっかりと持って、市立図書館のあり方にプラスしようとするのではなく、読書活動にプラスになることに限定していく方がいい。図書館が抱えている問題は大きくて、散漫になってしまう。子どもが考えることではなく、大人が考えることである。
- 会長 設問10から下の設問を入れると、範囲外の話がでてきてしまう。例えば設問9で「ほとんど毎日行く」と答えた子どもが、「インターネット」で、「読書をする」のが「年に数回」というデータがでたら、クロス集計しなければならない。何のため、どうしてほしいを言ってもらうのではなく、現状把握を前提としたアンケートにした方がいい。図書館に来る目的についても遊びにくる子どもも含めて、どのくらい利用しているのかを聞いていただく。その中で読書の比重を高めていくにはどうしたらいいかを考えていただきたい。その方がアンケートの流れとしては自然である。下の方の要望を聞く設問は、次元が違う図書館アンケートで、市民にながて調査しないといけないものである。クロス集計もしなければならない。このアンケートは、そこまでではないという前提で広げないとする他のところで手を入れて、ここは加えない方がいい

のではないかと。設問10は省くのはどうだろうか。

次にYAのアンケートについてはどうだろうか。YAに特化した形が入っている。電子書籍の設問が入っている。先程の流れでは読書の実態調査を行うことを目的にしようということになっている。要望は省いた方がいいのではないかと。「理由は」ときいている欄があるが、これは難しいのではないかと。どれに対してどう聞いているのかがわかりにくい。設問2は2つ選ぶようになっていて、その理由を聞いている。答えるのに苦労すると思う。範囲を広げてやる場合、このような問いはたてない方がいい。逆に15歳くらいになると、もう少し具体的に聞きたい部分もある。対象を広げるより、具体的なニーズを把握するために深い質問を入れるという発想であればやった方がいい。基本のベースはどちらなのか。傾向を知りたいレベルなのか。

事務局 全体的に2期のアンケートの項目を使おうということが連絡会で決まっている。つけ加えた部分は、最近の話題である電子書籍についての興味を聞く箇所と、YAの動向やニーズをきくことができたということ、要望や意見の記述箇所である。設問1～6までは、2期のアンケートそのままである。

会長 紙ベースでやるということであるが、手あげ式ではできないので、範囲を広げるとコストがかかる。広げられないなら、深い質問をするという考え方もできる。小学生と違って、記述できないのではないかと考える必要はないため、理由をきく項目が入っている。しかし、この質問だと全部入力しなければならない。前回それを集計時にやったのか。

事務局 前は、選択のものだけ集計して計画の冊子に掲載してある。

会長 きいた事が、反映されていないということになる。

鬼丸委員 アンケートは、反映するためにとるので、にぎりつぶすものではない。小学生でここまで緻密に調査して、中学でなぜ全然違う傾向のことをきくのか。府中市は、小中連携を進めているのに、関連性がないことに疑問をもつ。10年前は、教育事情が全く違っていた。家庭のあり方も全く違う。それを同じアンケートをとるのか。読書活動の推進に何の意味を持たせるのかと思う。前のアンケートは、現場サイドのアンケートではない。教育指導主事や教育委員会でこの程度やっておけばいいといった感じにしか受け取れない項目が多くある。これを踏襲するのか。これは指導補助員が入っていない頃のアンケートだと思う。指導補助員を学校図書館に配置する際に私は関わっていて、実際に府中の公立中学校を見学に行った。その頃の中学校の図書館は、鍵のかかった図書館で、昼休みは開いていなかった。一定の時間しか開いていなかった。それが、指導補助員が配置され、おとし見に行った時には、昼休みに180人位出入りしていた。すばらしい数字である。たった20分の間に180人がくる。これは元々図書館の持っていた機能である。読書だけしにくるのではなく、学年やクラスを越えた枠の中で、友達と図書館を利用している。図書館の持つ機能の大部分を子ども達は使い始めているのに、なぜ10年前のアンケートにこだわらなければならないのか。

事務局 2期の小中学校のアンケートは東京都が調べたものをそのまま使わせていただいた。それ以外の部分は、市が連絡会の中でやったものである。

及川委員 中学校も小学校と同じでいいのではないかと。

会長 野口先生の調査では、比較をするために全ての年代で同じ項目でやっている。次元の

違うアンケートをやっていることに対して、意味がないのではないかという意見が多い。高校生も同じアンケートをやっても構わないだろう。ターゲットである子ども達が読書をどのように行っているか考えているかを知りたいということである。YAで必要な項目は、別項目で付け加えればよい。全く同じフォーマットでやってみる。そして、YAに必要なものは「中学生以上は教えてください」と加えて項目に入れるのはどうか。以上ことを提言したい。野口先生のアンケートを見ると、項目をうまく作らないとできないということがわかる。

金沢委員 電子書籍に関してだが、お金がかかる。まず、ハードを買わなければならない。ダウンロードするのもお金を払わなければ、小説も読めない。古い小説等は無料のものもあるにはある。これに対して、おこづかいの乏しい中高生に普及率を聞いてもあまり意味がない。業界も大人をターゲットにしている。電子書籍に関する項目はいらぬのではないか。低い数値しかでてこない。

会長 電子書籍に関して低い数値が出ることはわかっていることである。

金沢委員 読書推進活動だから、特にこの項目はいらぬと思う。

会長 大学生でも全く関心をもたない。ただで入る物がたくさんある中で、お金を払って読もうとは思わない。高校生レベルでも同じだと思う。図書館に電子書籍が入ったら、喜んで読むというふうにはならない。YAサービスについて何か知りたいというのであれば、「YAコーナーを知っていますか」と入れておいた方がいい。

鬼丸委員 読書好きな子は、YAと書いてヤングアダルトとわかるが、本を読まない子はアダルトという言葉に反応する。YAは、赤木かん子さんが言いだした事で、それが日本の読書活動としていいかどうかという問題はある。ヤングアダルトを聞きたいなら、小学生バージョンと同じ項目にプラスして、純粋に読書活動を聞いてほしい。市内全校をやったら、日本一のデータになる。10年に1回と言わず、3年に1回サイクルくらいでやるといい。他市がやらないことをやってほしい。府中市は調布に負けていない。調布の貸出冊数は、マンガを含めてのものである。アンケートをやる以上は、先生達や子どもが喜ぶものが出てきてほしい。1部の人だけが喜ぶアンケートに子どもを巻き添えにしないでほしい。そのためには、人海戦術を使わない方法で、アップするまでの時間が短くできるといいと思う。毎学期できるようなものでもいい。図書委員に集計させてもいいのではないか。

及川委員 中高生なら、十分できると思う。

会長 設問4だけひっかかるが、アンケートの項目は小学生用に合わせていただく。要望はどうするか。

鬼丸委員 各学校で独自に聞く内容だと思う。別枠でやった方がいい。

及川委員 要望は、学校の先生に聞いてもらった方がいい。学校図書館をこうしてほしい、市立図書館で団体貸出をこんな風にしてほしいといった意見がでると思う。生徒だと「新しい本を増やしてほしい」といった内容になると思う。

茅原委員 保護者に要望をきいてもらってもいい。

会長 読書活動推進計画の中で、学校との連携が問題になってくる。しかし、このアンケートの中で問うことではないという意見が多い。YAのアンケートで、要望を聞く必要はなく、先程の児童用のフォーマットにプラスしてYAのことを聞くという形で検討

していただきたい。次に保護者向けのアンケートはどうか。設問1と他の設問をクロスでとりたくなるようなアンケートである。できれば、本格的に分析していただきたい。単紙の集計ではいけないと思うので、しっかりした入力体制をもたなければならない。内容に関してはどうか。少し時間がおしているのですがどう進めていくか。

事務局 このあとの予定などもあるので、今日はアンケート案のみの検討とさせていただく。今日は他の資料もお渡ししているので、地区館の運営については読み込んでいただいて、次回会議で意見をだしていただきたい。

会長 では、この保護者向けアンケートの内容について検討する。まず、自分の子どもが本を読むのかどうかを聞いて属性を特定した上で、自分がやっていることの教育方針を聞いていくといった流れである。設問1、2、4はつながりがある。設問3は次元の違うことをきいている。計画や利用の項目が入っているので、設問の順番を整理した方がいいと思う。問いの立て方の柱が十分精査されていない。実態を把握することから始めて教育方針を問うという流れでいく。

茅原委員 設問3は、いろんな統計で明らかになっていることなのでいらぬのではないかと。

会長 必要ないならとってしまう。推進活動に関するアンケートや、2択に場合分けするようなアンケートにするべきなのかどうか。

鬼丸委員 表題が気になる。「家庭での読書についてのアンケート」という題だが、前回もこういう案だったのか。児童、生徒のアンケートをした親全てに配布しているのか。特定の年齢なのかどうか。

高田委員 内容からみると、ごく小さいお子さんをおもちの保護者を対象と受け止めてしまう。事務局 前は、保育所・幼稚園の親に対する配布、保健センターでの健診の際に配布で、小中学校の保護者はなかったと思う。お父さんやお母さんが読んであげるところの意識をきいていたと思う。

鬼丸委員 「学校の勉強で忙しい」は親の対象を考えるとおかしい。

事務局 前回、全配布ではないが、抽出した学校の親にアンケートをとっている。

及川委員 今回、全校調査になったら、全保護者になるのか。

事務局 今のところ、連絡会では抽出してお願いする学校へのアンケートを考えているので、その場合保護者もその学校の保護者にお願いすることになる。

鬼丸委員 抽出というのは決定事項なのか。

事務局 前回の連絡会の中で、2期でお願いした学校へ依頼することを考えている。今回の意見は提言として連絡会にもっていく。

鬼丸委員 基軸が変わらないとこの2時間無駄だったのではないかと。意味をもたせるということでは分母が大きい方がいい。家庭での読書は家でする読書で、子どもは忙しいからしない。だから、学校教育や地域教育で読書推進していこうと思う部分がある。「読書に関するアンケート」だけの方がいいのではないかと。表題をみただけで、「うちの子読みません」と言って、アンケートを出さない親もいるかもしれない。そして、読書活動推進をもっとアピールしていった方がいい。こういう会を知らないと、子どもがアンケートを持ち帰った時、何に利用されるのか、情報は漏れないのかといった懐疑的な気持ちになる。

茅原委員 5年前の時には子どもの読書活動のアンケート結果として、計画の冊子に詳しく載っ

ている。

鬼丸委員 このアンケートに答える親は忙しい。ホームページで計画が出ていると言っても、興味のある人しか見ない。子どもの読書活動の推進に目を向けてもらいたいと思って、こういった活動をやっているはずなので、アンケートに簡単に答えられる形式の方がいいのかな、と思う。

茅原委員 小中学生の親に「市立図書館利用カードを持っているか」を聞くのはどうしてか。

鬼丸委員 「お子さんは図書館利用カードを持っていますか」と聞いた方がいい。親が知っているかどうかを聞いたらどうか。子どもが持っていたら、親は持っている。

会長 設問6、7は、何のために聞いているのか。設問5、8、9は、認知度をきく設問である。現在の実態だけをきく方がいいのかどうか。全体的に気になるところがあるので、もう一度考えていただくしかない。何をききたいのか、何を調べたいのかをはっきりして、それに沿ってアンケートを作らなければならない。何を知りたいか明確にした上で、保護者に対してのアンケートの項目を、いる、いないということを判断していただくということをやっていただきたい。

金沢委員 子ども読書活動推進連絡会の構成メンバーは、図書館や教育委員会以外の色々な課からも参加している。読書活動に項目を絞ろうと思うのは、図書館と教育委員会くらいである。他の部署は、自分のところでやっている事が、どれくらい効果があるのか知りたい。保健センターでやっていることが効果があるのだという事をどこかで知りたいという気持ちがある。読書推進という事に限定すれば、他の事はいれなくてやってしまった方がいいと思うが、行政の立場もある事を、我々の側も理解しておいた方がよい。結論は任せるしかないと思う。

鬼丸委員 ここできかなければいけないことなのか。乳幼児の健診は継続してあり、そこで答えてもらった方がいい。一緒にきかない方がいい。

及川委員 前は抽出の学校でやったということだが、もし、全校でやるとなると、先生にしてみると、いいように学校を使われてと思う場合もある。

茅原委員 推進連絡会の方で、どのようにPRしていくかが大事である。それによってこの5年間で何だったのか、ということになる。

会長 認知度や利用度をきく内容など次元違う内容のものが1つのアンケートに入っている。一度アンケートを作ると変更しにくい、やってみて意味のないものになる可能性もある。アンケートをしっかりとやる場合は、パイロットでやってみたりするのだが、今回はそういったことでもない。広報の面を強く出していくのか、内容に絞るのか、項目が混在しているので見にくい。抽出でやるのか、網掛けでやるのかは、コストやキャパシティの問題もあるので、お任せする。何のために聞くのかを意識して、アンケート項目を整理していただきたい。

事務局 5月30日に連絡会がある。市の各課10人の委員から成っている。今回の意見を連絡会に提言としてもっていく。府中市の図書館サービス検討協議会より、子ども読書活動推進計画を策定するためのアンケートに対して、内容や対象について意見をいただいたということで、はなしをする。決まったら、皆様に報告する。次の会議までには決定するので、事後報告になるがお知らせする。

会長 全て提言なので、連絡会に伝えていただきたい。結果がでたら、文句を言いたくなる

かもしれない。

鬼丸委員 6月にやる事が決まっているわけだが、府中市が子ども達にできる事をやってあげたい。子どもが育たないと市は育たない。府中市の子どもの人口は増えているので、今やってほしい。

会長 あげられている2つの議題は、次回審議したい。

事務局 年3回会議を開催することを予定しているので、次回は秋頃を予定している。3回目は来年2月頃の予定である。今回の議事録は、メールで送るので、また確認をお願いする。

会長 何かあれば、懇談会という形でやっていってもかまわない。事前に原案などをいただければ、集まった時に意見も出やすい。事務局から通知があった場合は、ご協力いただける方はお願いしたい。

閉会

次回府中市立図書館サービス検討協議会

日時：平成24年秋 (日程は後日調整する)

場所：府中市立中央図書館 5階会議室